

2023.3.1 発行 (Vol.5)

編集・発行 余市町建設水道部水道課

TEL : 0135-21-2130 / FAX : 0135-21-2144

〒 046-8546 余市郡余市町朝日町 26

HP : <http://www.town.yoichi.hokkaido.jp/>

さようなら朝日浄水場

From 1954 to 2022

余市町庁舎裏にあった朝日浄水場をご存知でしょうか？ 今回は昨年12月に解体工事を終えた朝日浄水場について、余市町の水道の歴史とともに、お伝えします。



解体直前の朝日浄水場
令和4年8月22日

調査開始



電気探水機による調査
昭和26年8月20日



水源井戸の位置選定
昭和26年9月14日

当時の余市町は、井戸の水質悪化やたび重なる大火災のため、上水道の必要が痛感されていました。余市町の人口では町内に井戸を掘りポンプで汲み上げても水不足になると考え、水源を余市川の伏流水※に求めました。

昭和26年8月、北海道開拓計画水源係、町水道課職員などで構成された調査班により、電気探水機を用いた上水道の水源調査がスタートしました。調査は山田町鮎見橋から上流約150mの地点を中心とした川沿いで行われました。

※伏流水・・・川の周辺や川底の地中を流れる地下水

水道がない時の生活は？



水が必要な時は井戸から汲んで、お風呂や洗濯などに使われていました。

水は生活に欠かせないため、水汲みは毎日しなければならない重労働でした。

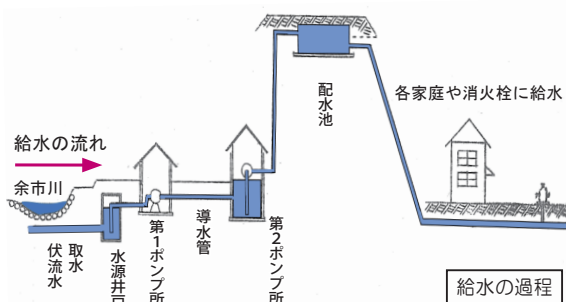
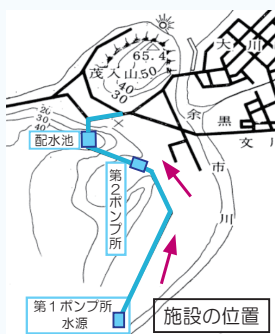


黒川町第2共同井戸



大川町第4共同井戸

水源発見と事業計画



調査の結果、鮎見橋から上流350mの畑内に水源を発見しました。

現在の水源地も当時とほぼ変わらない位置にあり、調査班は今日まで続く余市町の水道なくてはならない水源を発見したのです。

計画では水源井戸から第1ポンプ所(山田町水源地)に汲み揚げられた水を導水管で第2ポンプ所(役場裏)へ送り、そこで消毒したのちに配水池(警察署裏山)に送水し、町内に配られる仕組みでした。

朝日浄水場稼働



第1ポンプ所
昭和27年6月完成



第2ポンプ所
昭和28年12月完成

昭和26年9月19日に工事が開始し、昭和29年2月1日に初めて黒川地区の家庭約80戸に給水されました。着工から供給まで約2年4か月という短期間でした。

給水開始当時は余市川の良質な伏流水を井戸で取水し、ろ過をしないで塩素消毒のみの処理で給水していました。また、使用時間が6時～8時、11時～13時、17時～19時の3回と決まっており、現在のように常時、使うことができませんでした。

なぜ使える時間が決められていたの？



A



給水開始当時は配水池が未完成であり、第2ポンプ所から直接、各家庭に給水していました。そのため、常に給水を行うと電力費や人件費がかかり、当時の利用者数では採算が取れませんでした。また、ポンプを絶えず稼働すると、使用量が少ない時間帯に水道管内部の圧力が高くなり、管が破損するなどの理由から使用時間が決められていました。

配水池が完成した昭和29年10月15日から自然流下による完全給水が実現しました。



配水池掘削
昭和29年6月12日

浄水施設増設



急速ろ過池建設
昭和41年12月完成

昭和37年11月頃より「水道の水が濁る」との問い合わせが相次ぎました。原因は台風9号、10号の災害復旧工事が余市川上流で行われ、濁水が頻繁に発生したためです。また、昭和40年には原水に含まれる鉄分が原因で『赤い水さわぎ』が起きました。

このような背景があり、水源の変化に対応し、安定して水を供給するため、昭和41年6月29日、第2ポンプ所横に急速ろ過池の建設が始まりました。

どのように水をきれいにしていたの？

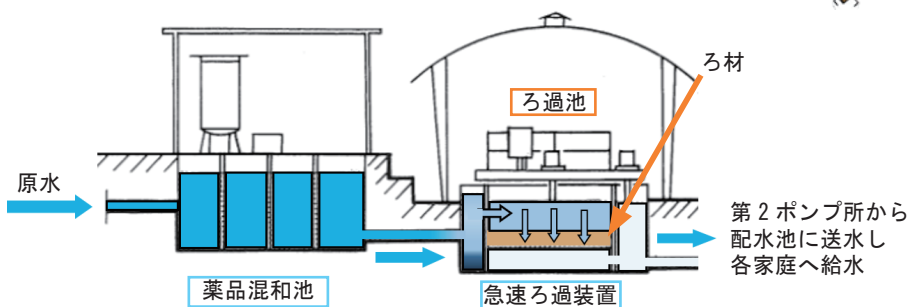
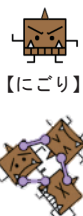


A



第1ポンプ所から圧送された原水を、薬品混和池という場所で薬品と混ぜ合わせ、にごりなどをくっつけて、沈みやすい大きな固まりにします。

その後、砂などを用いたろ材に通し、きれいな水にします。半円形の建物には、ろ過池が2面ありました。



急速ろ過池上屋



急速ろ過池

おつかれさま朝日浄水場



第2ポンプ所解体



急速ろ過池解体

朝日浄水場は、余市町水道事業が給水を開始した昭和29年から、後継となる余市川浄水場が誕生した平成21年まで、余市町の最も大きな浄水場として水を作り続けてきました。その後は休止施設として維持管理されてきましたが、令和4年に実施した解体工事により、長い歴史に幕を下ろすこととなりました。

水道ができる前の生活は、共同井戸で水を汲むことがあたりまえでした。しかし、今では家に居ながら必要な時に安全で安心な水が手に入るあたりまえへと変わっています。これからも『あたりまえ』であり続けるために、施設の維持管理や管路更新を進めていきます。